

---

# 現在進行形

佐藤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現在進行形

### 【Nコード】

N1320T

### 【作者名】

佐藤

### 【あらすじ】

とある駄目男が、優しい人たちに助けられて、合コンで出会った女の子と、仲良くなろうと頑張るストーリーです。現在進行形の作者の物語です。

## 出会い（前書き）

作者の出来事です。

## 出会い

数年前の出来事。

友達に誘われて、クラブのイベントに参加した。

人見知りの僕が、そんなところで耐えられる訳が無かった。

興味本位で行ってみたけど、飲みすぎで女の子に絡んでいた。

「ピンポン、ピンポン！」

と、女の子に肩を触られる毎に、意味の無いことをしていた。

インターホンの物真似。

そして、友達につまみ出された。

そんな友達とは今も続いている。

数年後、

ぼろい携帯をずっと使っていたら、何もしていないのに突然にデーターが消えてしまった。

連絡先が誰一人としてわからなくなってしまい、付き合いのある友達は一人もいなくなってしまうた。

それから1年後、

知らない人からメールが来た。

「ひさしぶり、会社辞めたの？」

「だれ？、携帯のデータ全部消えたんだ」

僕をクラブに誘った友達だった。

通勤先が変わった僕を見かけてメールをくれたみたいだった。

その日のうちに飲む約束をした。

数週間後、二人で飲んだ。

そして、自分のためだめぶりを話した。

自分の27歳での初恋の話。

振られてからは飲んだくれていること。

クラブでの思い出話。

「ピンポンの人怖い」と、女の子に言われていたらしい。

そんな昔話をしていた。

そして、楽しく飲んでいた。

すると、友達が僕のことを気に掛けてくれて、今度女の子と飲み会をしてくれると言ってくれた。

僕は、あまり乗り気ではなかった。

人見知りの僕は、まともに話せるか判らなかつたし、気まずい飲み会になってしまうのが怖かつた。

自分にも自信が無かつたし。

でも、友達はこう言った。

「俺の友達だよ。みんないい人だから大丈夫。」

そう、言ってくれた。

僕も、その友達に入っているのだろうかと思うと、少しうれしくなつた。

そして、居酒屋を出て、一人暮らしを始めた友達の家に遊びに行った。

一人暮らしを始めて、初めて招いた友達らしかった。

テレビが大きかった。

とてもいい友達だと思った。

数日後。

僕は、友達の約束をあまり期待してはいなかった。

飲んだ席で、勢いで誘ってくれることは良くあるし、わざわざ人の為に、女の子の飲み会をひらいてくれるのは、大変だと思うので、さすがに無いかなと思っていた。

でも、メールが来た。

「24日飲もうぜ！」

「うん、いく！」

最初は二人で飲むのだと思っていた。

誘ってくれたのでうれしかった。

でも、ちょっと違っていた。

「2対2だからね」

「・・・」

「マジでー！」

感謝の言葉を送った。

それから、

いままで履いていたポロポロの靴を買い換えることにした。  
草を食べている靴。

冗談で、「靴を変えてみるよ」とメールを送ったら。

「全身コーディネートしてみたら」と帰ってきた。

いつもどおりの格好はやはり駄目なのだと思った。

「頑張ってみるよ」と返した。

ボーズからボサボサに伸びた髪。

くせっ毛で剛毛。

服もぼろだし、靴もぼろ、全体的にバランスは整っていた。

だけど、

服を買いにユニクロに行くと、浮いている自分がいた。

ださい男が、服を選ぶのも恥ずかしかった。

とあるシヨッピングモールでメガネを探してみた。

髪の毛がボサボサすぎて、似合っているのか全然判らない。

1000円の床屋でカット良くしてもらおうと思ったら、とっばい  
お兄ちゃんに酷い髪型にされた。

女の子との飲み会まで2週間を過ぎていた。

さすがにあせった僕は、友達と相談する。

「お店の人に聞けばいいんだよ」と、言われた。

ポロポロのカッコでお店に行くのは、結構恥ずかしいものである。

頑張っちゃってる感が丸出しである。

お店の鏡を見るたびに、気になるのはボサボサの髪。さすがにこれをおどろかさないとな・・・と思った。そして、黒ぶちのメガネを探した。

何度も色々なお店に行ったけど、何を買えばいいのか判らなかつた。ただ、白シャツにジャケットが鉄板だという事だけは判った気がする。

普段、物にお金を掛けない性格がおしゃれと言う行為を邪魔していた。

髪を切るのも、メガネを買うのも、靴を買うのも、服を買うのも悩み続けた。

そして、3、4回通ったメガネ店で、やっとメガネを購入することが出来た。

6000円の黒ぶちメガネ。

飲み会まで1週間で切っていた。

ちなみに、なぜ黒ぶちにこだわったかと言うと、

キャバ嬢さんが、

「絶対に髪を軽くして、黒ぶちメガネにしたらカッコいい」と言ってくれたからである。

人に言われたことは、比較的素直に聞いてしまう。

そして、メガネを買った勢いで、髪を切ろうと思った。

・・・思った。

1時間ウロウロした。

そして、なんとか勇気を出して1500円の床屋さんに入った。

どいう髪にすればいいのか判らないので、なんて言えば良いか判らない。

初めて、まともに髪を切ってもらうので緊張した。

でも、ここの床屋さんはとてもいい人だった。

自分にあう髪型を教えてください、親切丁寧に色々なことを教えてくださいました。

そして、ツーブロックの髪型になり、ライオンだった髪型がさっぱりと整ってしまった。

いつぞやの床屋とはえらい違いだ。

とても親切にしてくれて、サービスでワックスを塗ってくれた。

「合コン頑張つてね」と応援してくれた。

服装の相談にも乗ってくれたいい人だった。

そして、出来上がったメガネを取りに行く。

ボサボサの髪型だったときは似合っているのか判らなかつたけど、意外と似合っている。

そして、自分を見て「だれだお前」と思った。

鏡に映るのは自分じゃなかつた。

後日、会社に行くと「誰？」といわれた。

飲み会まで3日。  
いまだに服が決らない。

会社の後輩と3人で仕事の時に、すこし聞いてみた。

「拓ちゃんの髪、カッコいいね」

「そうすか、バッチリ決めてますから。伊藤さんもワックスつけた方がいっすよ」

「やっぱりワックスつけた方がいいのかな」

「絶対いっすよ。」

そして、何気なく服の話題になった。

ちなみに後輩はよく合コンに行っている。

比較的軽くて、とてもいい奴。

そこで、色々聞いてみた。

まあ、話の流れで自分が合コンに行くと言ったら、嬉しそうに相談に乗ってくれた。

まず、コンビニでメンズノンを立ち読み、服装の享受を受けた。しゃべりについてや、話題の振り方など、色々教えてくれた。

そして、

「仕事終わりに、服と一緒に探しますよ」と言ってくれた。

ちよつと、抵抗があったけど、素直にお願いした。

後輩に、こういう相談もいかなものかと思った。

帰り道は反対なのに、大宮で色々なお店を教えてくれた。

服の組み合わせやら何やら、色々服を持って来てくれては試着をし、一生懸命選んでくれる。

そして、自分も気に入った服が見つかった。

さわやか系、白シャツ、ジャケット、ズボン。靴はまだ草を食べている。

帰りに、飲みに誘い、そこで合コンの極意を教わった。

「ちよいちよい、嘘を言つて大丈夫ですから、まず自信を持って行くことつすよ。」

ちよいちよい嘘をつくのはどうかと思うけど、自信を持つのはいいことだと思った。

後輩は、自分と一緒に合コンに行きたそうだった。

合コンに行きたいと言うより、自分の事が心配だったように思える。

いい後輩だ。

遅くまで、自分の為に付き合ってくれた、良い奴だ。

そして、そのままキャバクラへと向かった。

後輩が気に入った女の子が出来たので、相当時間お世話になってしまった。

自分は自分で、合コンの極意をキャバ嬢さんに教わっていた。

いつも不思議だけど、

なぜ、こういうところではお金が使えるのに、自分の物を買わないのだろう。

最後に後輩に言われたこと。

「絶対に財布を買ってください。」

ホチキス止めの財布は、女の子に引かれるらしい。

そして、  
飲み会当日。

当日まで、靴には悩んでいた。  
ほしい靴と、服に合う靴。

基本的に良く歩くので、トレッキングシューズがほしかった。  
けど、6000円のナイキの黒い靴にした。

ボロボロの靴をゴミ箱に捨てて友達のもとへと向かう。

友達と服が思いつきりかぶった。  
白シャツと黒ジャケ。かろうじてズボンは違っていた。

池袋に向かう途中に、後輩のことを話した。  
「ちよいちよい嘘をつくのはよくないと思うよ」と言われた。  
僕もそう思った。

「嘘でカッコつけても、女の子にはれるからね。しかも相手は年上だから、よけい判っちゃうよ。」

ちなみに僕は、年上が好みらしい。  
それを前の飲み会で言っていたので、2歳年上の女の子を誘ってくれたらしい。  
年下か年上か悩んでくれたみたいだけど、飲み会の話覚えていてくれたらしい。  
良い友達だ。

そして、そわそわする自分。  
そんな自分をみて、友達は「判るよ。その気持ち。俺も最初そうだったから」

と、なんだか嬉しそうだった。自分とは違ってとても社交的な友達も、似たような思いをしていたのだと知った。

そして、池袋での待ち合わせ。ものすごくソワソワする自分。

女の子と、なにを話して良いかも判らなかつた。

友達は、「自分もまったく同じ感じだったよ」と嬉しそうに言ってくれる。

そして、不意に女の子がやって来た。とても可愛らしい女の子。

僕は緊張して、顔が見れない。

友達は、気さくにその女友達と話している。

女の子は、あとから来るもう一人の女の子を迎えに、また駅に戻っていった。

あわてふたむく自分。「どうしよう、どうしよう」「である。

そして、また不意に女の子が現れた。

差し出がましいようだけど、最初の子の方がかわいいと、思った。でも、あとから来た子も、とてもかわいかった。

僕は緊張して、早歩きになり、皆を置いて行ってしまつくらいだった。

「伊藤君早いよ」と友達にたしなめられる。

僕は「どうしよう、どうしよう」と友達を小突きながら連呼していた。

緊張して何も出来ない自分。

でも、友達は話題を振ってくれながら話をしてくれてたので、ものすごく助かった。  
ときばきと仕切ってくれる友達。  
片言の日本語の自分。

だけど、友達のおかげで少しづつ話が出来るようになっていった。  
自分でも不思議なくらい、普通に話が出来た。

友達が言っていた通り、『友達の友達はとても良い人』だった。  
だから、普通に話すことができた。

後輩には言うなと言われたけど、  
耐えられなくて普段の自分ではない格好をしていることを言ってしまった。  
まった。

後輩に選んでもらったことも。今日は人生で2回目のワックスだと言ったことも。

自分じゃない格好が恥ずかしかった。

取り合えずは、見た目の第一印象は良かったらしい、後輩に感謝だった。

そして、  
印象がとても知的に見えたらしく、インドアなのかと思われていたらしいけど、  
自分の趣味が比較的サバイバルな事だったので、ギャップを感じてくれたらしい。

後輩が「ギャップが大事」と言っていたのを思い出した。

意外と自分の話に興味を持ってくれて、その後も店を変えて終電まで飲んでくれた。

別れ際、後輩からの指令をまっとうすべく、かなりぎこちない方法

で電話番号を交換した。

「後輩に、電話番号は絶対に聞いてくださいといわれました。」  
正直に言ったら、二人ともすんなり教えてくれた。

友達に「普通に聞けよ」と突っ込まれた。

後輩に言われたからは余計だったらしい。  
たしかにその通りだと思う。

そして、

帰りの電車の中でメールをした。  
軽いメールを送ろうと心がけて。

そして、その日は友達の部屋に泊まった。  
良い友達だ。

そこで、気に入った子を聞いてみた。  
友達は、友達の女の子と仲良くしていたので、てっきりその子が好きなのだと思っていた。

だけど、その子はただの友達だと言う。  
その女の子が連れてきてくれた女の子の方が好みだと言ってくれた。  
仲良く話しているから好きなのだと思っただけ……。

友達は僕の好みをよく知っていると思った。  
どれだけ僕に合わせて飲み会を開いてくれたのだろうと、なんだかいたたまれない感じになる。  
そこまでして貰ってうのも悪いなと思った。  
友達に甘えすぎだと思った。

だから余計に、もう友達に頼るのはいけないと思ってしまった。  
この考えがのちのちの失敗に繋がる。

そして、僕はメールをどうやって送れば良いのか悩んでいた。  
『普通のメール』その普通が僕にはわからない。  
返しやすい、軽いメール。何のこっちゃい？

翌日の朝。

僕がもじもじしながら友達にメールの相談をする。

「なんて送れば良いのか判らない」

「普通に書けば良いんだよ。趣味を聞くとか」

その普通が判らないんです。

また、会いたいけど誘って良いのかも判らない。

取り合えずは、

昨日電車で帰ってきたメールには「また、一緒に飲みたいですね」と返ってきていた。

友達のアドバイスを受けてこう送った。

「昨日はお仕事があるのに遅くまでお付き合い頂いてすみませんでした。朝は起きれました？」

無難だ！と、友達が天才だと思った。

その日の夜にメールを送り、2回ほどやり取りした。  
しかし、友達に言われたアドバイスは実行できなかった。

「必ず最後は疑問系で送れよ、そのまま話を終わらせるなよ」

そう言われていたのに、メールの話を終わらせてしまった。  
さて、次はなんてメールを送れば良いのだろう。

## 失敗

それから僕は3日間メールの内容に悩んでいた。

友達が、僕に気を使って、

本当は気に入っている彼女を勧めているのではないかと思ったりもした。

もう一人の女の子の事も気にしてしまった。

4人での飲み会なのに、

せっかく教えてくれたメールアドレスに送っていない。

僕が好きになった人にしかメールを送らないのはなんだか気が引けた。

だからこそ、友達に電話をして聞いてしまった。

「ふっ君の方はメールしてるの？」

「え、なんで？まあ普通にメールしてるよ」

「いや、せっかく皆で飲んでるのに、そんな気になった子にだけメールするのもどうかと」

「いいんだよ。そんなの気にしないで、全然関係ないんだから。だから言ったじゃん。自分の事は気にしないでガンガン行っちゃって良いって、俺だって毎日メールしてるよ」

「え？本当？」

「そうだよ、だから全然気にしないでメールして大丈夫だよ」

「そうか、なんだか安心したよ。皆で友達として飲んだのに、なんか1人だけと仲良くなったら気まずくなるのかなと思ったけど・・・そっか、じゃあ普通に誘っても良いんだ。」

「そうだよ、気にすること無いよ。仲良くなれるかは伊藤君しだいだけどね（笑）」

今度も4人で飲むのに、

二人だけでメールし合うのも気まずいのではないかと思っていた。だけど、友達もメールを送っていると聞いて、安心した。

普通に好きなら、メールを送って良いのだと判った。

そして、『普通のメール』だよ、と念を押された。軽い感じで、返しやすいメール。

僕にはその普通がわからなかった。

普通って何だよ？僕は一生懸命に普通を探したけど、僕の中にはなかった。

そして、すこし冗談と笑いを入れて、彼女を誘うメールを送ってみることにした。

1時間ほど悩み続けて書き上げたメール。

しかし、そのときは判っていなかった。

とても返事に困るメール。

冗談とも、笑いとも取りづらい、自虐的メールを送ってしまったのだ。

2日間メールが返ってこなかった。

そして僕は、さらにメールで失敗してしまうことになる。

最後に（笑）をつけないと、笑えないメールもあるのだと知った。

冗談で送っているけど、冗談かどうか悩ませるメールを送ってはいけない。

冗談は、冗談だと判るように書かないといけないのだ。

返事に困るメールは送ってはいけない。

そもそも、

返事に困るメールというのが判らないので、どうしようも出来ないことだった。

気軽に返せるメール。質問とか、気軽なメール。

それが普通というらしい。

仕事で泊まる宿に車で移動中、ため息だけがこぼれた。

事情を知らない会社の先輩に、

うざいと怒られるしまつで、それでも時折ため息をこぼしていた。

そのたびに、は！として先輩にごまかしていた

その日の夕食。

僕の職場は、基本的に泊まりの仕事は飲み会になる。

同期がとなりの席についた。

実は、同期には飲み会のことを内緒にしていた。まあ、意図的に内緒にしていた訳ではなかったのだけど、話す機会もなく。

後輩との買い物のときに、

偶然に同期と遭遇していて、なんとなく気まずい思いをしていた。

後輩は僕に気を遣ってか、何も言わなかった。

明らかにおかしいな3人組は、

帰り道とは別方向の駅で、3人一緒に降りていく。

同期は何も言わずに「お疲れさま」と言って帰っていった。

それがあったので、そのときの事情を話した。

せっかくなので、失敗メールについて相談させてもらった。

同期のメールの採点。

ずばずばと切り捨てられた。

80%ほどの文章は要らないといわれ、とにかく固いといわれた。自虐メールはNGだと知った。

そんなことを送られても、コメントのしょうが無いらしい。笑いのつもりで入れたのだけど・・・。

普段、友達と話すようなメールで良かったらしい。

「お見合いか？」と言われた。

「会ったのが初めてじゃないんだから、もっと軽くしろ。固い。」と言われた。

笑いになるように、「冗談は、はっきり判るようしないといけないらしい。

そして、僕は終わったと思った。

同期にコテンパンに言われて自信をさらになくした。もう、メールが返ってくることはないと思った。

そして、

1日200件も送っていたと言うメールマスターの同期にメールを伝授してもらった。

僕レベルに落としてくれたメール。

それでも、かなりきわどいくらいフレンドリーになっている。

さすがに変わりすぎているとは思ったけど、そのまま使わせてもらった。

もう駄目だと思っていたから、もう一か八かだった。

同期は、

「おまえレベルに合わせて作ったけど、そのまま送らない方が良いでしょう」

と言っていたらしいけど、その時の僕はまったく聞こえていなかったらしい。

かなりフレンドリーになったメールをそのままに送ってしまった。

自分で考えても、明らかに今までと違う内容である。

バレるとは思っていたけど、意外と大丈夫かもしれないかもと希望を持っていた。

まさに一か八かだった。

すると、

飲んでいる最中に友達から電話が掛かってきた。

友達には『メールで失敗した』と送っていたのだ。

心配して電話を掛けてくれたのだった。

会社の人と飲んでいたので、その時は話せなかったのだけど、飲みが終わった後に電話した。

友達に、

「やつちゃったね、だから自分が誘おうか？って言ったのに」と言われた。

でも、友達は、

「絶対に大丈夫だよ。彼女は絶対返事をくれるよ。そういう人だから。まだ大丈夫」

そう言ってくれた。

そんなことを言われたけど、僕はそんなことは信じられなかった。

絶対に嫌われたと思っていた。

そんな人にメールなんか送らないと思う。

そう思っていたら、彼女からメールが来た。

とても、嬉しかった。

まだ続けられると思い、とても安心した。

変なメールを送ってしまったけど、何とか挽回しようと思った。

やってしまったことは仕方が無い。

同期に感謝した。

同期のおかげでメールが返ってきたのだと思った。

友達にメールを送った「きた！」

友達からメールが来た「やったじゃん」

良い友達だ。

そして、次の日に、彼女の空いている日をメールで聞いた。  
直ぐには返ってこなかった。

泊りでの仕事が終わり、

電車で自宅に帰っている途中にメールが来た。

「22日なら大丈夫だと思います」

残念ながらその日は仕事だった。

でも、返事が来たので顔がずっとにやけるくらい嬉しかった。

友達が言っていたことが、本当なんだと思った。

「忙しいからメールの返事は、けっこう遅いよ」と言われていた。

そして、返信のメールを考える。

さんざん失敗しているので、さっそく友達に相談しようと思電話した。

そして帰りがけに、そのまま友達のうちにお邪魔した。

そして、

いままでのメールのやり取りを説明しながら相談を受けていると、友達の電話が鳴った。

彼女の名前が表示されている。

なんだろう？とドキドキしていた。

そして、友達は、彼女からの相談をされる。

とても返しづらいメールでなんてコメントすれば良いのか悩んだとか。

なんか、メールのところどころで後輩の影がちらついてみえるとか。伊藤君てどんな人とか。

みんなで飲もうと誘われたんだけど、ふっ君は予定あいてる？とか。伊藤君は私の事なにか言ってる？とか、彼に相談されてる？とか。

そんな内容が電話越しで聞こえてくる。

「私に彼のこと勧めていたでしょ。」と言われて、

「そんなことある訳ないですよ。」と笑って答えている。

2、3回そんなことを言われたと言っている。

たぶん無意識に、友達は勧めていたのかもしれない。

僕はまったく気が付かなかったけど・・・。

僕がどんな人かと彼女に聞かれ、友達は言った。

「伊藤君は良い奴だよ。飲み会での時もそうだったでしょ。」  
彼女も頷いている。

メールのことは全部彼女にばれていたのだと判った。

それでも皆で飲んでくれるとメールを送ってくれた彼女。

自分の失敗にへこんだけど、  
それよりも、なんでこんなに彼女に気を使わせているんだろうと思  
った。

なにをしているんだよ、自分。

彼女は、

「このことは絶対に彼には言わないでよ」  
と、電話越しで言っているようだった。

それを真横で聞いている僕。

途中で、部屋を出て行った方が良いと思ったけど、  
どうして良いか判らずに、その場でゴロゴロと転がっていた。

はたからみたら面白い出来事だけど、とてもへこんだ。

友達は、

彼女と自分に挟まれながら、とても気を使って話しているのがよく  
判った。

とても気まずそうだった。

同期が作ったメールに返事をくれたのは、  
返信に困っていたところに、ガラッと変わったメールが来てしまっ  
たので、

僕に気を遣って、急いでメールを返してくれたのだと判った。

ただ、困らせていただけだった。

そのまま缶ビールを買いに行った。

「一緒に飲んでくれ」と友達にお願いした。  
そして、そのまま泊まってしまった。

一か八かで送ったメールは失敗だった。

そのまま大人しく待っていれば良かったのだと知った。

最初から、

友達にだけ相談していれば良かったな、と思った。

僕の友達は、とても確なことを言ってくれる。

自分のことも、彼女のことも知っている友達。

まったくタイプの違う人に相談するのは良くないのだと思った。

友達は自分もそうだったと教えてくれた。

昔の自分も、最初は同じ様に失敗していたと言う。

とても協力的で親切的な友達。

いくらなんでも、

いきなりメールの内容が、敬語からため口に変わるのはいくらない。  
あたりまえだ。

電車の中で、

彼女に送ろうと考えていたメール。

さすがにそのまま送れなくなってしまった。

また一から作り直した。

いきなり、もとの敬語に戻ったら、聞いていたことがバレってしまうので、微妙な感じでメールを送った。

「22日は仕事なのでとても残念です。6月にあいている日曜日はありますか？」

彼女は仕事が遅いので、お休みの日曜日しか飲みにいけないそうだ。

僕は、もう彼女に嘘をつきたくないと思ってた。

正直に全部話したいと友達に言った。

友達は「駄目」と言った。絶対に終わるから。

「でも、自分のせいで友達に迷惑がかかってしまうのは嫌だし、正直に自分がやったことを言ったほうが良いと思う。」

「それこそ駄目だよ。内緒だよって言われているのに、伊藤君に言っちゃったんだから。そんなことをいったら俺が嫌われるよ。友達として気まづくくなるよね。」

「そうか・・・」

彼女が自分のことで、悩んでくれていたと知って、嬉しさもあった。だから余計に嘘はつきたくないと思った。

友達が言った。

「彼女が電話してくるなんてよほどの事だよ。今まで2回くらいしか電話したことが無いんだから、電話が来てビックリしたよ。」

確かに自分もビックリだ。

自分が相談してきたのに、彼女も電話で相談してきたのだから。

落ち込んでいる僕を見て、勇気付けてくれる友達。

「大丈夫だって、彼女なら大丈夫。また会ってくれるよ。メールでも言っただでしょ」

「うん」

そして、

友達には彼女に会うために6月の日曜日をすべて空けて貰った。友達がいないことには成立しない皆との飲み会。

でも、

すべて知っているのに、それを隠して会うのはとても気まずい。嘘をつきたくないし、とても良い人に気遣わせてしまっている自分が嫌だった。

そして、

そんな中でも、今の状況が客観的に面白いと想着ってしまう自分もいた。

なんだか最低な自分。

「だから言ったのに、また4人で飲めるように誘おうか？」

「いや、でもふっ君に頼ってばかりいるのも悪いし」

「それは違うよ、こういうのは全然人任せとかじゃないよ。ただ飲み会を開いているだけなんだから、そのあとは伊藤君の頑張りしただよ、その先をお願いされたら困るけど、飲むのを誘うだけだったら全然大丈夫だよ。」

「そうなの？」

「そうだよ。だから言ったじゃん、気にしないでって。全然良かったのに。」

「そうだったのか・・・。」

最初から友達にだけ相談していればよかったよ。

「彼女はメールが返ってくるのは遅いよ」と教えてくれたのに、それを信じて待っていたら自爆メールを送ることも無かった。死ぬほど後悔した。

もう駄目だと思って送った一か八かのメール。

それが彼女を困惑させて、気を遣わせてしまった。

返事が返ってきたので、最初はこれで良かったのだと思った。

でも、彼女はすぐに別の人が考えたメールだとわかったのだと思う。

僕のことを気遣って、わざわざその自爆メールに返事を書いてくれた。

そのことが、とても辛かった。

この一週間、

彼女からの返信はない。

## 友達

彼女にメールを送ってから10日が経った。

僕も、少し気持ちが落ち着いてきていた。

5月、ゴールデンウィークは、ほぼ毎日が仕事だった。

土日もほとんど仕事で埋まっている。

忙しさもあつて、それほど考える暇は無かったのかも知れない。

仕事が終わって電車での帰り、

次の日が久しぶりの2連休だったので、友達にメールを入れてみた。

「土日はいそがしい？」

ひまだったらあそぼ（笑）」

そして、友達も気になっていると思って、後に付け足した。

「彼女からは、

今のところ音沙汰無しです。」

しばらくしてメールの返信が来たけど、休みの予定は合わないようだった。

そしたら

「今日は？」と返事が返ってきた。

そのまま、

また二人で飲むことになった。

最寄の駅で待ち合わせ。

友達はまだ、仕事から家に帰る途中だった。

魚民で飲むことになったので、あたりを見渡す。

しかし、どこにも魚民が見つからない。

あるのは、少しおしゃれな木造風のお店。

よく見ると「魚民」と書いてある。

今の魚民はだいぶ雰囲気が変わったんだ、と思った。

少し遅れてやってきた友達。

電話が掛かってくる。

「今どこ?」

そう言われて、あたりを見渡す。

ちょうど影になっていた自分。

「もう居るよ!」と、言うと、友達は後ろに振り返った。

「ぎゃくぎゃく」

「おお!」

「全然見えないから、駅の方を探しちゃったよ」

「その服、良いね」

「カーディガン良いでしょ」

「今度は、そういうのを着ようかと思ってたんだけど、取り合えず服は決ったよ」

「なになに、どんなの？」

「青シャツに、黒ズボン」

「・・・」

だまる、友達。

「思いつきかぶっているし」

今度からは、事前に確認しようと思った。

取り合えず、

そのままお店の中に入った。

雑談をしたあと、

メールの話題になった。

「メールのことを、彼女に謝りたいと思うのだけど、どうだろう。」

「失敗メールをいまさら謝ってもだめだよ。」

送られた方は『だったら最初っから送るな』って思うから。送る前に考えろってさ。」

そのとおりだと思った。

たしかに、人の考えたメールを送られたら、嫌な気分になると思う。しかし、送った本人は、そんなことを考えられる余裕は無かった。

友達に、そのときの状況を説明した。

「失敗した！」とメールを送った日に、友達が電話をくれた時のこと。

僕は早く相談がしたくて、早く飲み会が終われば良いと思っていた。同期にメールの相談をして、どんどん落ち込んでいったこと。

同期が僕に合わせて作ってくれたメールを、もう一か八かしかないと想着、

のまま送ってしまったこと。

そのときは飲んでいたので余計に考えることが出来なかったこと。

「なんか漫画みたいだね。」

もし、その日の夜が飲み会でなければ、メールを送らないで済んだんだ。」

「うん、そつだと思つ。」

自分のために一生懸命考えてくれるから、気持ちをむげには出来ないし、気持ちを裏切つてはいけななと思つて、そのまま行つてしま

った部分もある。

そして、友達に言われた。

「会社で相談した二人は全然タイプが違うんだよ。

たぶん、その相手の方も彼女とは全然違うからね。

その人たちの言う相手と、彼女のタイプ、相談した人と、伊藤君のタイプ、

どちらも違うんだから、そのまま参考にしても駄目だよ。」

「そっか、そうだね。

自分に自信が無いから、同期の言う事が正しいと思っていたけど、最初から自分の考えで行けばよかったんだ。」

「そうだよ。だから俺と相談していれば良かったのに、

そうすれば自爆メールを送らなくて済んだんだよ。」

「そうだよ、だからメールを送ったんだよ『メール失敗しちゃった』って。」

ふっ君が電話してくれたとき、その時にすごく相談したかったんだから。

早く飲み会が終わってほしいとすごく願ったもん。」

そして、一か八かの失敗メールを送ってしまった。

そして、彼女が気を使ってメールを返してくれた。

「そうだったんだ。なんか、タイミングが悪すぎだね。」

「端からみたら、とても面白い状況なんだけどね、・・・当人だから辛い。」

友達の言葉は素直に入ってくる。  
最初っから、友達とだけ相談していれば良かったと本当に思った。

飲み会するとき、

友達は僕に気遣ってくれているのは感じていた。  
だけど、それ以外にも手助けしてくれていたのだと、今日初めて知った。

僕は、友達は彼女が好きなのかを聞きたくて、  
「つれシヨンに行こうよ」と彼女たちがいる前で友達に言った。  
すると友達は、「お前は中学生か」と言っただけで断った。  
それが、友達の気遣いとも判らず。

「そのまま、女の子二人を残してトイレに行ったら失礼でしょ。  
打ち合わせしてるの、もろバレだからね。  
だから、普段トイレに行かないのに2回も行ったんだよ。」

「?????・・・ そうだ！  
僕もその時にふっ君に言ったよね、普段行かないのに今日は珍し  
いって。」

「そうだよ、伊藤君に合図を送ってたんだよ。  
きつと相談したいんだろうなと思ったから、  
自分がトイレに行った後に、少し間を空けて出てくれば良かった  
んだよ。そうすれば自然でしょ。」

伊藤君全然気がつかないんだもん、ずっとトイレで待ってたんだ  
よ『遅いな』て。

途中メールを送ろうと思ったんだけど、携帯テーブルに置きっぱ

なしだったから……。」

「そうだったんだ……」

全然気がつかなかったよ。そこまで気を使ってくれてたんだ。」

「そうだよ、伊藤君の為に飲み会を開いたんだから。」

「君はどれだけ良いやつだよ。」

なんだか泣けてくる。」

「最初は、とりあえず次に繋げて電話番号の交換だけさせてあげようと思っただけけど、」

伊藤君が暴走して聞いちゃったよね。」

「やっぱり、『後輩に言われたんで、番号交換してください』は駄目だったんだね。」

ふっ君のつつこみに助けられたよ。」

「会計の時に言ってくれば良かったのに、  
女の子はブーツだから時間がかかるでしょ、そのときに相談すれば良かったんだよ。」

最初から、別れの際に番号を聞いてあげようと思ってたんだから。」

「そうだったんだ……ふっ君すごいね。」

さりげなく、相手に気づかせないように相談するなんてすごいね。」

とても感心する。」

自分のことながら、自分がとても幼稚だと思った。」

そして、

今後の為に、友達にメールのやり取りを教えてもらった。

「さりげなく普通にメールをすればいいんだよ。」

すると、タイミングよく、

メールの練習を手伝ってくれると言ってくれたキャバ嬢さんからメールが来た。

合コンの相談をした子である。

タイミングが良すぎて笑った。

そして、友達に事情を言ったら、「さっそく練習しちやいなよ」と言う。

普通にメールを返そうとするけど、

僕はまったくメールの言葉が出てこなかった。

しかし、友達は普通に言葉がでてくる。

それは才能だと思った。

メールの返しがさりげなさ過ぎる。

僕は友達を神だと思った。

それを言うと友達は笑った。

「何言ってるんだよ。自分なんかよりすごい人はいっぱい居るよ。」

確かにメールがすごい人はいると思うけど、友達ほど良い人はいないと思った。

僕が付き合いのある人で、これほど気遣いしてくれて、メールも出て、やさしい人はいない。

わざわざ僕の為だけに、女の子との飲み会を開いてくれるのだから・・・。  
自分も頑張らないといけないと思う。

話の途中に、友達の電話が鳴った。

「ごめんね」と言って電話にでる友達。

友達の奥さんが一ヶ月で流産してしまったという。

その人は、「こんど会ったときに、嫁の前で子どもの事は言わないでね。」とお願いをしていた。

奥さんを気遣う電話、僕だったら、どうしよう、どうしようと、かける言葉が見つからないで慌てるのに、彼はすらすらと自然に相手の友達を励ましている。

「子どもが生まれるって伝えちゃった人がいるから、ごめんちょっと電話するね。」

そして、友達は別の人に連絡する。

「・・・まあそう言うわけだから、

子供のことは触れないで、今までどおり普通に接してあげましょう。」

電話の会話を聞いていて、友達は大人だなと思った。  
自分だけ、中学生のままだと思った。

そんな気遣いは僕には出来ない。

メールや飲み会でさえ気が回らないのに。

それを見ていて、  
僕は素直に友達にお願いをしてしまった。

「これからも色々教えて、  
自分も、もつと気遣えるようにがんばります。」と言った。

友達は「もちろん」と答えてくれた。

仕事だから悪いと思っていたのだけど、

「11時くらいまでなら、いつでも大丈夫だから」と友達は言ってくれた。

そして、2週に1回の飲み相談をお願いしてしまう。

どれだけ面倒な奴だろうと自分で思ったけど、友達は笑って「全然良いよ」と言ってくれた。

そして、

時間を見ると、11時を過ぎていた。

「もう帰ろうか」と僕は言った。

自分の方が飲んでいたので割り勘。

しかも相談してもらっている。

「じゃあ、今度サーキット行くとき、タイヤ代とガソリン代は全部出すよ。」と言った。

僕が友達に返せるのは、こういうことしかなかった。

飲み会は開けないけど、車で遊ぶところはある。

「お互い、まじめすぎるんだよ。

大丈夫、また会えるよ。絶対彼女だったら返事くるから。」

そう言っつて、友達は帰っていった。

だれにも言っつていないけど、

女の子との飲み会の次の日、お台場に出かけて砂浜を歩いた。

ずっと海を眺めていた。

そんな気分だった。

海がゆっくりと流れていて、とてもきれいだった。

平日のお台場はすいていて、カップルがまばらに歩いていた。

お店が撮影で貸切になっている。

台場跡の柵を越えて、端っこの石垣で腰を下ろした。

目の前は海だった。

5メートルくらいはあるだろう高さ、

そこで、足をばたつかせながら缶コーヒーをチビチビと飲んでいた。

昨日はとても楽しかったけど、これからどうしようかと、ぼけぼけと  
考えていた。

2年くらい前に失恋した僕は、ここで感傷に浸っていた。

## 27歳の初恋。

こんどはうまく行くといいなと思っていた。

## 傷（前書き）

だいぶ時間がたってますが、本当に当方の実話なので、どうしようもないのですが、ただ、知り合いには見せたくないです。

ちなみに、前編からの合コンは、仕事やら、遊びやらで、4人の予定がまったく合わず、いまだに再会のめどはたっておりません。

## 傷

僕が、初めての合コンをする前に出会った女の子。

たまたま、後輩を連れて行ったキャバクラ。

僕は、とくに指名を取るようなことは無かったけど、後輩はお気に入りが出来ていた。

2、3時間お店に居て、僕の隣に座った女の子。

その子のことが、とても気になった。

キャバクラの女の子とは本気にはならないと思っていたのに・・・

これから合コンをするために、服も買ったし、外見も整えた。

それなのに、どうしてもその子の事が気になった。

そして、久しぶりにキャバクラで指名をしてしまった。

お店の営業メールは沢山くるけど、自分からメールを返すことはほとんどなかった。

それなのに、その子には自分からメールをしてしまった。心配だった。恋愛なのかと思うくらい。

僕の夢。

それは、大切な人を助けること。

そして、小説を書くこと。

その出会いから2カ月後に、彼女との物語が始まる。

自分でも不思議なくらい、彼女のことを気になってしまった。

彼女も、そういつたことを見せるつもりも無かったと思うけど、なぜか気になってしまった。とても、酔っていたと思うけど、気になっってしまったんだ。

彼女は笑っていたんだ。

とても一生懸命に、自分で強くなろうと。

僕は、彼女に手を見せてもらった。

彼女は、「手相を見るの？」と、言ったけど、僕は違うものを探していた。

そのときは見つからなかったけど。

それから、2ヶ月。

僕は一方的にメールをしてしまった。

自分の勘違いならそれで良いと思って、嫌われることよりも、彼女のことを気になった。

1月くらいメールをして、彼女からメールが来ないので、迷惑かも知れないと少し待っていたら、彼女からメールが来た。

それが、だいたい、彼女と初めてお店で出会った2カ月後だったと思う。

「なかなかメール出来なくて 本当にごめんね ずっと体調崩してて 死んでます」

僕は、勘違いでも良いからと思って、彼女にメールした。彼女が自分と思う通りなのではないかと思って。

もう一度会いたいと言う。もっと仲良くなりたいと言う。今は寂しいと言う。

そして、言いにくそうに僕にキャバクラの同伴をお願いしてきた。僕は、良いよと答えた。僕も会いたいと言った。

彼女の言葉は、いままでのキャバクラの女の子の言葉とほとんど一緒だったけど、僕はどうしても会いたいと思ったんだ。

次の日に、僕は会社を休んで、彼女を築地のお寿司屋に連れて行った。そして、お台場の、とある綺麗な景色の場所に連れて行った。砂浜を裸足で歩いたりした。彼女はとても喜んでいた。

彼女は車が怖いと言った。だから、無理に車には乗せたくないかと思っただけど、大丈夫と言った。後に、車に乗るときに不安を感じなかったのは珍しいと言われた。

その日は、彼女のお店に行き、ずっとお店に居た。来る前から決めていた。彼女は驚いていた。

そして、お店が終わった後も、居酒屋で会った。僕は、半分寝てしまったけど、どうしても彼女を元気付けたくて、ずっと手を握っていた。

怪しい人と思われるくらい、一生懸命に手を握ろうとしていた。

彼女居ない暦29歳の男が……。

そして、始発の電車で彼女と別れた。彼女が落ちていくのを感じながら、とても心配でどうしようもなかった。

僕は、そのとき後悔すると思ってしまったんだ。  
これ以上関わると、自分が後悔すると。

でも、もう出会ってしまったし、いまさらどうしようもない。

そのときの彼女との会話で、彼女は言いづらい部分は言わないでいたけど、僕はその先が想像できてしまった。これ以上は簡単に聞くことは出来ない、これ以上は友達としての付き合いではなくなると思った。

本当に思った通りの女の子だった。

人生で、1、2番くらいに悩んでいる。

彼女も不思議そうだった。

そこまで考えてくれた人に出会ったのは初めてだと。

僕が彼女の手を見て探していたのは、彼女の心の傷だった。

コスプレの長袖の制服の時は見えなかったけど、ワンピースの彼女の手にはあとが残っていた。

どうしようもなく、せつなくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1320t/>

---

現在進行形

2011年10月9日00時27分発行